

久保三千雄

原書 東洲齋寫樂画

武蔵元年正月
於筆池閣



小説春峰庵

浮世絵贗作事件



新潮社

小説春峰庵浮世絵巻

事件

久保三千雄

江苏工业学院图书馆
藏书章

新潮社

小説 春峰庵浮世絵贋作事件

© Michio Kubo 1997, Printed in Japan



平成九年二月二十五日 発行

著者／久保三千雄

発行者／佐藤隆信

発行所／株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話 編集部〇三・三三二六六・五四一
読者係〇三・三三二六六・五一

郵便番号 一六二

振替 〇〇一四〇—五—八〇八

印刷所／錦明印刷株式会社

製本所／大口製本印刷株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛
お送り下さい。送料小社負担にてお取替え
いたします。

ISBN4-10-411902-4 C0093

価格はカバーに表示してあります。

小説 春峰庵浮世絵贋作事件・目次

序 章

矢野家の消息、中興・惣助のこと

7

第一章

矢野家の都落ち——
道楽を元手に浮世絵店を開店のこと

31

第二章

商売の不調——
長男専太郎が道楽が培った鑑定眼を発揮すること

56

第三章

専太郎が関東大震災に遭遇し、
美術界の暗部を覗くこと

83

第四章

専太郎がスエコを身請けし、
果師として商売人の世界にかかわること

110

第五章

矢野家の良心・照子の死、
親子で贋作に手を染め商売人が見誤ること

136

第六章

矢野家の品物が商売人の間で混乱を呼び、
専太郎が悪く開き直ること

163

第七章

矢野家のふしだらな血、
貧すれば鈍すで裏世界にどっぷり浸ること

190

第八章

生活の立直しを図る専太郎が、
ペンを握ろうとするが逆に足を取られること

217

第九章

裏世界から脱けたい専太郎が、
商売人の欲望に翻弄され深間に嵌まること

243

第十章

商売人、墮落した学者の欲望が、
矢野親子を窮地に追い込むこと

270

第十一章

矢野親子の贋作が世に晒され、
悪事露見のこと

297

第十二章

身の置き所もない矢野家で、
末子の満が天才と囃されること

324

終章

再び岡山に転じ空襲で無一物となり、
またぞろ悪く立ち廻ること

354

あとがき

377

装画
装幀
「春峰庵華寶集」より
新潮社装幀室

小説 春峰庵浮世絵贋作事件

序 章

矢野家の消息、中興・惣助のこと

「あの家は先代より遡^{さかのぼ}つた話はしねえんだ。親父の話だけで爺さんとなると、もう口に出来ねえ」

「伊勢の出と言ひ条、矢野は代々女の生血を吸つて暮しを立ててきたというぜ。見てろ、いまに生血を吸われた女の怨みに崇^{たか}られて、元の木阿弥に還^{かへ}つちまわあ」

どうかすると妬心一杯に話の種にされた矢野家が江戸に店を構えたのは、封建の世の疲弊が顯著に見えはじめた嘉永が安政に轉じた頃——。その以前の矢野家は、まだ港には遠い伊勢四日市宿場の混雑を南に切れ込んだ横丁の小体な構えに高砂屋と古びた看板を掲げ、ようやくと鑑札を守り継いできた商船持ちであつた。宿場町の殷賑の裏側に封じ込まれた、明治と御代が代わつてからもどうかすると昼日中、洗ひ髪の飯盛女が小走りに往^ゆき來^きした一角で、高砂屋の先々を迎れば何が出てくるか判つたものではない。

矢野家の中興が惣助で、明かされたことのないその先から二十歳^{はたち}になるやならずで家業を受け継ぐや、時代の商機に天賦の商才が巧く合致して、高砂屋は一代にして肥え太つた。幕末の混乱、騷擾をものともせず、口の奢^{もつ}つた江戸ッ子の氣^きつ風^{ふう}を頼りに寿司米に目をつけ、伊勢の三穂と極

め付きに称されたうちの一つ、寿司米「龍雲」を扱ったのが人気を博して大当りを掴んだ。惣助は莫大な稼ぎをそっくり注ぎ込んで、江戸深川伊賀町に廻米問屋の看板を掲げたから、伊勢四日市では永らく惣助の馬鹿当りを知らない者のほうが多かった。

惣助は深川に店を構えるに際して屋号を平松屋とした。三河から立ち上がって二百数十年の余も続いてきた権現様の家系でさえ、一吹き風の風に揺れ騒ぐのを見せ付けられれば、惣助でなくともちつとは憚りある方角の暗愚を嗤ってみたくもなつたであらう。惣助にすれば將軍様ゆかりの松平の姓を逆様にして、「將軍様でも船底の手入れを怠ると、不意の横波に覆される」と自戒を籠めた屋号の心算であつたが、四日市の高砂屋を知っている伊勢者に、「郷の店の額も替えたか」と訊かれたほどのことで、惣助が屋号に籠めた真意に気付いた者はなかつた。尤も、それを読み取る者でもいたなら、たちまち御咎めを蒙つて、惣助の頭は軀から離れてしまつていただろう。

惣助の江戸深川出店は万延元年、明治の御一新に八年先立つ快挙であつた。

有卦に入つた平松屋の隆昌は目覚しく、外国交易が素因となつた諸物価の高騰、不作続きが惹き起こした天井知らずの米価の暴騰が俵いに拍車をかけ、深川の掘割沿いに十余棟を算える蔵の白壁を朝日に輝かせたにも、然程の日月は要さなかつた。平松屋の繁栄については勿論、惣助の商才発揚を認めなくてはならないが、その陰で奔走した惣助の幼馴染み、弥七の存在を忘れてはならない。弥七は伊勢四日市に在つて、米の買付けから帳付けに至るまで高砂屋の一切を束ね、惣助は弥七あつてこそ売り方に専念傾注できたのである。

惣助、弥七の仕事の分担が定められたには、深い仔細はない。弥七は漁労を生業とした父と兄が唯一の財産と誇つた漁舟もろとも、一吹きの時化で海の底に嘸み込まれた記憶が拭い去れなく、どう肚を括らうとしても船に乗れなかつたし、親兄弟の墓を他人任せに出来なかつた。惣助、

弥七がそれぞれの死に至る三十有余年を共同で仕事に励んだ間に、弥七がたった一度しか江戸の土を踏んでいないには、それなりの事由があったのである。惣助、弥七の二人は日々肥え太る平松屋の隆昌を隠したいかのように、伊勢四日市の高砂屋は元のままの貧弱な店構えで押し通した。若齢にして大店の旦那に成り上がった惣助は、持ち前の商売への粘りが思い掛けないまでの美形に生れ付いていて、商売の腕もさることながら、紅燈の街でも極め付きの花形の顧客として鳴らした。勇み肌を頬被りした惣助は、付合いの席で床柱を背にするだけでは足りず、独りでも小まめに吉原なかは勿論、柳橋、深川はいうに及ばず、品川の果てまで若さにまかせて遊びにあそんで、処に土地柄となつて染み着いた氣つ風の異いなどにはとんと無頓着に、光溢れ絃歌さんざめく妓楼であれ岡場所と蔑んで称された遊所であれ、氣の向くまま選ぶところがなかった。それぞれの土地に「惣さんの……」と岡焼きされる女があつた。

文字通り降るほどに大家たけからの縁談が持ち込まれたが、結句、家に入れたのは深川の待合茶屋の女中で、お米という名の働き者で聞こえた女——。惣助に見初められたお米が、深川に至る前歴については、房州の生れという当人の言葉以上に、確たる生い立ちを知る者はない。お米は芸妓に転じても充分大看板を掲げられた、色白の豊饒な雰囲氣の娘であつた。十二、三歳で待合の下働きに住み込んだときから、不思議に涼やかさを乱されなかつた娘で、裾の短い着物のまま奥向に呼び付けられ、妓楼の主や待合の女将から膝詰めで座敷に直る話を持ち掛けられたのも三度や五度ではなかつた。お米は脛坊主を隠そうと着物の裾を引っ張りひっぱりしながら顔を伏せ、平生の起居振舞からは思いも及ばない鈍重を表にして、否も応もなく強情に口を噤み、口説きにかかつたほうは断りさえ引き出せずに、先に匙を投げた。深川の色町で誰知らぬ者のないまで永らく語り継がれた話である。お米は色町で下働きする女に特有のこつてり肉置きしめの豊かな女に育

ち、腰廻りの見事な張りがしたたかな意志と零れるような色気を滲ませた。女將連中はお米の風姿を惜しみながら、氣働きの確かなお米の出世に首肯したのであった。

惣助三十歳、お米が二十三歳、ともに遅蒔きではあったが、二人は弥七一人を前に深川伊賀町の母屋の二階でささやかに盃を交した。岡焼きする者される者が、意外な決着に驚き口惜しがるうとも、上洛中の將軍様の御不例までが囁かれていたうえに、不穩の世相が遊所に向かう遊治郎を袋叩きするまでに民心を荒^すませていたのが、色町を避ける恰好の口実となつて、惣助は岡焼き連中から腕や脇腹を抓り上げられる災難を免れた。

生涯にたった一度、陸路江戸に下つて惣助の婚禮に列なつた弥七も、遊びでは引けを取るものではなく、新婚の二人を横目に見て、折角の江戸下りを無駄にするものではなかった。新婚の惣助がまた、三日も我慢出来たのが精一杯、口実を設けては抜かりなく弥七の遊びに付き合つた。將軍様の御不例さえ隠しおおせぬ不様なお上の煽^{おほ}りをもちに喰い、不穩の世相に意氣上がらぬ色町ではあったが、そこはそれ蛇の道はへびで、惣助が加わつて二人になると、茶屋を沸き返らせるくらいはお手のもの、またそれが出来る金もふんだんにあつた。

弥七がお米に遠慮したから、惣助が付き合つたのは一日置きであつたが、「煙管^{きせる}の火を近付けるな、軀に溜まつた酒氣に火がつく」と大声に喚き、弥七がまた「お祭が過ぎて腿肉が落ちた」と戯言とも本氣ともつかない悲鳴を上げて半月ばかりを過ごした後、突然二人は平松屋の二階に閉じ籠もつて酒も女も断つた齋戒沐浴の二日間を送り、早朝に起き出すと「支店出店のための下見」と称して、横浜に向けて足拵えをした。惣助、弥七の変わり身の鮮やかさには、それまで眉根を寄せていた平松屋の女中たちが、「まるで大石良雄の討入りだ」と感嘆したのであつた。

廻米問屋にお米とは縁起がいいと弥七が膝^たを敲いた新妻は、茶屋の女將が客を送り出す風に、

二人の出立に機嫌の良い笑顔で頭を下げた。待合の女中がたちまち大店の御内儀に化けてしまふ女の底知れぬしたたかさが頼もしかった。柔らかな衣着物を上手に帯で締め上げ、早朝とはいえ七月の朝の陽射しを斜めに顔に受け止めながら、額を汗ばませもしない爽やかなお米の笑顔に頷いた弥七は、みっしり盛り上がって見えるお米の膝を見て慌てて目を外らせた。顔付から起居振舞、何からなにまでたつぷりとしたお米が御内儀に納まったのを、弥七は惣助のためだけでなく平松屋、高砂屋にとつて何よりのことと大切に慶んだのであった。

五、六年前から横浜では、伊勢の伊藤小左衛門なる男が茶葉の輸出に乗り出して大当りを取り、有卦に入つて評判となつていた。米を買い集めながら弥七は、仲買人から茶葉が外国に大量に売れる話を聞き、怠りなく裏も取つて確かめていた。「米の扱いを手控えるまでもなく、嵩張つても軽い茶なら船のどこにでも収まるではないか」と、惣助よりも弥七のほうが商いの拡大に乗り気となつての横浜入りであつた。

茶の売買について教えを請うために訪れた小左衛門の店は、後に伊勢佐木町と改められる埋立地の吉田新田にあつて、一帯には外国商館が建物の高さを競い、外国貿易に携わる商家の出店が土埃にけむつて見える道を挟んで軒を並べていた。

小左衛門は仕事に忙殺されていて、木で鼻を括つたような物言いで顎を振つただけ。店先に取り残された二人は、帰るにかれれず窮屈に控えて待つよりなかつた。小左衛門の仕事が一段落したときには、燈を点す時刻になつていたが、小左衛門は疲れた風もなく懇切に外国人との取引について話してくれたばかりか、己の店と然程隔たらぬところに店に恰好の土地まで世話してくれた。倅いな追風に押しやられるようにして、平松屋が茶葉の輸出にも手を伸ばすことが本定まりとなつた。

お米が引き止めるのを振り握るようにして弥七が江戸を發つと、惣助は独り横浜店の普請に掛かり切つて、深川に戻るのは十日に一度がやつとなつたが、お米は顔色を変えるところか横浜店の普請が目鼻がついた頃には、何処からか御家人崩れて蘭語がこなせるが触れ込みの、伊木三右衛門なる蒼瓢箪あわびようたんを搜してきた。出店準備に忙殺されて、その先の言葉の心配などつゆ思いもしなかつた惣助にとつて、お米はなかなか機転のきく大当りの女房であつた。待合の女中時代から變つたといへば、着るものが少々柔らかくなつたばかりなのに、店の者にも惣助に対しても、お米は本店の御内儀として充分の貫禄を示したのであつた。

御家人崩れの蒼瓢箪は阿蘭陀語オランダが少々読み書き出来たばかりで、外国人相手の商売に初手には口ほどにもなくおろおろ後退りあとすしたのが、武士にはあるまじき奇妙に器用な男で、たちまち手真似交りに結構取引をこなすようになったばかりか、一ヶ月もすると茶色の髪の毛の男と肩を敲き合つて笑うのには、惣助が呆氣にとられた。伊木がしたり顔に、「もう阿蘭陀では駄目です、これからは英吉利イギリスだ」と弥蔵をきめて見せても、惣助には外国は外国で、阿蘭陀、英吉利の區別はつかなかつた。

商売の順調は薄気味悪いまでのもので、値を吹かけて値引きしてみせるコツを覚えると、怖いほどに売れにうれた。弥七から送り届けられる荷物が二日と保たなかつた。四日市への帰り船には常に茶葉の荷の催促状が託され、ついには惣助は、「早速にもつと多量に送られ度」と認め、「もつと、もつと」を二十回も重ねて書いたりもした。

横浜の地で難なく欧風に馴染んだ惣助は、裏の空地に馬小屋を建てて四、五頭の馬を飼育し、外出時には二頭立ての馬車の音を轟かせた。外国商館員との付合いで日本人の貿易商たちが辟易へきえきさせられたビールも呑んだ。苦味には閉口したが負けん気の強い惣助は、ビールに砂糖を混ぜて

でも吞み続け、外国商館員より先にはグラスを置かなかつた。そうこうするうちには外国商館員の好みも心得て、相当には荒つぽい外国商館員を啣えて振り廻すようになるにも日にちは要らなかつた。

惣助は何より横浜の自由闊達な土地柄を悦び、茶葉の扱ひの堅実を見届けると、早々に横浜を本拠とすると定めて店の裏手の空地を買占め、店に不釣合なまでの宏壮な母屋の普請に取り掛かつた。番頭たちに任せて置ける深川店の安泰もあつたらうが、深川には伊勢者が多く流れ込んでいて面倒も多く窮屈だつたのである。

時代に先走る横浜を本拠としたかつた惣助の先見はともかく、お米を横浜に呼び寄せるには、思い掛けない面倒な口説を弄さなくてはならなかつた。お米は聞いたこともない新開地と言ひ立て、奥向の横浜移転に難色を示した。顔見知りの白粉臭い色町の連中が、用も無いのに挨拶に立ち寄る深川では、「お米も氣詰りだらう」の氣配りからの斟酌であつたのに、惣助の思惑とは異つてお米は、深川で贏ち得た運命の転換を、深川の地で噛み締め味わいたかつたのである。「とにかく横浜を見ろ」と惣助に詰め寄られて洪々重い腰を上げたお米は、深川に劣らぬ横浜店の母屋の佇まいに安堵したか、そのまま横浜に落ち着いて豊饒な軀に艶と奥行を重ね、たちまち大店の見事な御内儀と評判をとつた。

横浜の平松屋は輸出の茶箱に錦絵風の木版画を貼つて、外国商館員の異国趣味を誘うこともした。そのラベルの下絵は二世歌川広重が描いた。二世広重は初代の没した後、師の養女お辰に入婿して師家を継ぐ幸運に恵まれたものの、絵など買い漁る者がいる御時世でもなければ、妻女との間に波風の立たぬ日はなく、入婿して六年後には離縁されて喰いつめ、喜斎立様を称したり歌川広近の後を継いで二世広近と改めたりした挙句、流れ着いた横浜でよんどころなく描いた茶箱

の意匠が思い掛けなく評判となつて、《茶箱広重》の異名をもて囃された。実は茶箱に木版画を貼ることも、外国商館員が好む余処よところの茶箱の評判を聞き及んだお米が、深川時代に顔見知りであつたのを倖いに無理遣り引き受けさせたので、すべてはお米の才覚であつた。

二世広重にとって平松屋は願つてもない御得意様で、礼心に「床の間の隅にでも……」と一幅の美人画を届けてきたことがあつた。長押みづしに割箸を突き差して開いた幅には、元禄風の濃艶な遊女の立ち姿が多彩な彩色でこつてり仕上げられてあり、初世を凌ぐと評判の腕前が発揮された見事な出来栄であつたが、お米は一瞥をくれるでもなく無視したし、惣助も落ち着かない絵だとすぐに捲き直して番頭に藏に納めさせた。惣助夫婦にとってすべてこの世は絵空事では済まされなかつたし、艶っぽい話はそれと許された場所を選ぶのが嗜みと、これは二人にとって暗黙のうちの同腹事だつたのである。

平松屋の隆昌とは裏腹に惣助がお米を娶つた年あたりからは、江戸でも此処彼処で打毀しが頻発し、したり顔に末世を言う者が市井で持ち上げられるなど、不穩の跳梁が隅々にまで及んだ。お米が横浜に腰を落ち着けた慶応三年の秋ともなると、打ち続く凶作が惹き起した米の高騰に触発されたか、生活に疲弊した民百姓の怒りが奇妙な情熱に収斂されて表された。誰が旗を振つたとも知れぬ、溜り水に湧いた蚊が一斉に飛び立つと同然に、同時多発的に「ええじゃないか」大乱舞の嵐が吹きまくつた。一揆や打毀しに比べれば罪はないとはいへ、「ええじゃないか」を繰り返して、憑き物に振り廻されるように狂気乱舞する群衆に、不可思議な熱つばさが剥き出しになつてゐるのが無気味であつた。お伊勢さんの神符が降つたとの噂が伝わると、「ええじゃないか」の嵐は一気に東海道、近畿一円に飛び火して、煮立つた油に水を振り掛けたような騒ぎは、止まるところを知らない一層の勢いを示した。取り締まるべき役人が手を拱こまねいてゐるよりないの